

「基礎研究推進室雑感」

国際原子力総合技術センター技術交流推進室 荻野 伸 明

筆者は、平成6年4月から2年間基礎研究推進室長を務め、この4月に転出した。伊達センター長の強力なリーダーシップのもとでユニークな運営が行われている先端基礎研究センター（センター）において、地道にそれを支えている基礎研究推進室（推進室）の役割の一端や、事務屋から見た2年間の感想を若干述べさせていたきたいと思う。

センターは、平成5年4月に発足し、その1年前からセンター設立の中心的役割を果たした推進室が、センターにおける庶務を担当することとなった。

原研他の研究部における事務の体制は事務長を置き、その下に少数のスタッフを配置するのが一般的である。センターでも推進室が行う業務や人員構成は他の研究部の事務室と大差ないが、国の認可を受けた組織であり、“基礎研究を推進する”ための企画立案・調整等の機能を有している。

推進室長の役割としてまず心掛けたことは、センター長の女房役に徹することであった（特に伊達センター長は外部から招聘した方であるので、原研内部との橋渡しの業務を中心として）。さらに、

- ①グループが14もあり、しかもその半分は外部の非常勤の客員研究員がリーダーを務めるという求心力の働きのにくい状況の中で、各リーダーとのコミュニケーションを緊密に行う。
- ②センター運営の特徴である“研究者の創造性、自主性を尊重”し、弾力的な運営を行う。前例のない提案でも合理的なものであれば実現に向けて対処する。
- ③原則として5年後に評価が行われる各研究グループにとって純粋に研究に従事できる時間の確保は最も重要な事であり、そのためになるべく“雑用”は発生させないよう工夫するか推進室が引き受ける。
- ④上記の実現の基盤として最も重要なことであるが、事務室の雰囲気をも明るく保つよう努力すること、スタ

ッフに意欲的に仕事に取り組んでもらえるようにこちらの考え方を示し、理解が得られるよう働きかける。等々であった。

ただしこれは自分として心掛けたことであり、どの程度実現できたかは第三者の評価に委ねるしかない。しかし④に関しては、筆者が見るところ事務スタッフは実に良くその趣旨を理解し、実行してくれたと思いき感謝している。

一方、所内各部門のセンターへの理解と支援に対しても謝意を表したい。この2年間必ずしも事がスムーズに進んだわけではないが、各部門の対応振りは前向きで、こちらの意向の大部分が実現できたというのが実感である。これは原研の管理部門の意識が変わりつつあることの一つの表れでもある。その背景にはまだ発足後3年という短い間にも着々と成果が出ている実績、センターに対する期待感、原研を取りまく厳しい情勢から生ずる危機感や変革意識等々があると思われるが、このような状況はセンター設立の波及効果の一つであり、その波紋が原研全体に良い意味で広がっていくように願うものである。

最後に、一番印象的だったことは、リーダーシップの重要性である。冒頭にも述べたように、伊達センター長の強力なリーダーシップが全ての根源であり、その重要性を間近に見聞する事が出来たのは筆者にとって貴重な経験となった。センターが常に“先端的な研究”に取り組み、成果を生み出すために最も必要な要素がここにあるのではないかと思われるが、如何であろうか。

センターも次のステップに向けて、新たな展開を図る重要な時期に直面しており、任を離れたのは残念ではあるが、センターがさらなる発展を遂げられることを祈念している。